

＝ 暑い～、エアコン … そのエネルギーは？ ＝

2020年の立秋は8月7日頃から22日頃にあたるという。つまり暦の上では、お盆前から秋ということだが、とにかくあつい・暑い。地球温暖化による気候変動と言われて久しいが、残暑どころか真夏の大暑・猛暑、うだるような暑さが続いている。

熱中症患者の救急搬送も増えているというが、新型コロナウイルス感染拡大の第2波によって救急隊をはじめ、受け入れ医療現場も大変な状況が続いている。こうした方々に、これ以上ご苦勞をかけないためにも、私たち自身が日常生活での十分な注意を払っていかねばならない。

熱中症は防げる病という。こまめな水分補給、暑い時は無理をしない、外出時には日傘、帽子の着用、そして、お年寄りにも声を掛け、部屋の風通しを良くし、室内の温度に注意することが肝要。職場における環境改善と体調管理はもとより、労使でチェックを願いたい。

その熱中症防止のために欠かせないのが冷房設備。今や家庭のエアコンをはじめ、職場の空調設備や、現場のスポットクーラーは必需品。ところが、冒頭に触れた地球温暖化防止対策の一環であるCO<sub>2</sub>排出削減との関わりでエネルギー問題が取りざたされている。当たり前のことだがエアコン等を運転するためには電気がなくてはならない。

日本のエネルギー自給率はわずか9.6%。2017年時点でOECD加盟国35カ国中34位となっており、石油・石炭・天然ガスといった資源に乏しく中東やオーストラリアからの輸入に頼っている。その中で、特に石炭は、温室効果ガスの排出量が大きいという問題もあるが、地政学的リスクが化石燃料の中で最も低く、熱量当たりの単価も化石燃料の中で最も安いことから、現状において安定供給性や経済性に優れた重要なベースロード電源の燃料として評価されている。

こうした中で、過日、経済産業省は低効率な石炭火力発電の9割に相当する100基程度を2030年までに段階的に休廃止する方針を公表した。高効率で低炭素化をめざした次世代火力発電技術の開発は引き続き重要課題であることは間違いないが、原発稼働停止の状況からは足もとの重要なエネルギー源である石炭火力のベースロード電源としての重要性は増しており、その実行は慎重に行われるべきである。エネルギー基本計画のエネルギー需給率（再生可能エネルギー22～24%、火力発電56%、原子力発電20～22%）との関わりや、地球温暖化対策の観点からも安全が確認された原子力発電再稼働とセットで進めなければ、私たちの暮らしに直結する電力の安価・安定供給は適わない。

もちろん、太陽光や風力なども計画に照らして進めることは大切だが、自然変動電源を中心とした再生可能エネルギーでは、技術的にも経済的にもベースロード電源は代替できないという専門家の声もある。

エネルギーには、「3つのE（エネルギーの安定供給、経済効率性の向上、環境への適合）＋S（安全性）」を満たすことが求められる。しかし、ひとつのエネルギー源でそのすべてを満たすことは難しいからこそベストミックスを掲げているはず。

私たちは、脱炭素化という世界的な潮流の中で、ものづくりに欠かせないエネルギー安定供給に万全を期しながら脱炭素社会をいかに実現していくか、経済と環境問題をいかにして両立させ働く者の暮らしに安心・安定をもたらすかという視点で、先を見据えつつ、現実に対応を求めてきた。これからもその思いに変わりはない。

なんとも暑いこの時期に、頭まで熱くなることを綴ったが、暑さ・寒さをしのぐためのエアコン、コロナ禍でのステイホームなど、生活に欠かせない電気エネルギー。そして何より、私たちの命を託す医療現場にも電気がなくてはならない。

エネルギー？ 暑い今だからこそ、少しばかり考えてみることも大切…。

ご安全に

2020年9月1日

日本基幹産業労働組合連合会  
中央執行委員長 神田 健一